答　辞

寒さもようやく緩みはじめ、穏やかな春の光に新しい季節を感じます。

本日は、ご来賓の方々、館長先生、諸先生方、保護者の皆様のご臨席をたまわり、多くの在校生出席のもと、このように素晴らしい卒業式を開いていただいたことに、卒業生を代表して御礼申し上げます。

時の流れとは、充実した時を過ごすほどより速く感じられるものである。修猷館での生活は、入学したあの日のことがつい昨日のことのように思える。

あの日修猷館に入学してきた僕らは、これから始まる高校生活という未知なる世界への大いなる期待に、胸を膨らませていた。しかし、そんな期待とは裏腹に僕らを待ち受けていたのは、厳しい試練だった。訳も分からずただ全力で叫ぶことを求められたつらい応援歌指導の日々。突然突き付けられた、　真の修猷生になれ。」という理解しがたい言葉。　何という学校に

来てしまったのだろうか。」あの時多くの人がそう思ったに違いない。しかし、あの指導には、先輩方の、修猷への熱い思いがこめられていた。

そうして一つの試練を乗り越えた僕らは、九重の宿泊研修に向かい、「真の修猷生」を目指す旅路の第一歩を踏み出した。今日まで歩んできた道は決して平坦なものではなかった。クラスの叡智を結集させて企画を生み出したあの大文化祭のように、時には何もないところに道を拓き、また、「例年を超えるものを」と熱くなったあの大運動会のように、時には進む方向で争いながらも熱い思いをぶつけ合い、優勝に向かってただひたむきに走り続け、過去の先輩たちが通ってきた道を踏み越えてきた。

その旅路で僕らは多くの人に出会い、支えられてきた。

苦楽を共にし、本音を語り合えるよき友、十里踏破遠足では、励まし合いながら長い道のりを一日中歩き続け、沖縄研修では過去の歴史にも目を向け、国際平

和について語り合った。
頼りになる先輩方、全校生徒の前で堂々と話したり、部活で素晴らしい活躍をしたり、僕らの前を歩く先輩方の格好良い背中を見て、自分もあのようになりたいと思った。
自分についてきてくれる後輩たち、彼らがいたからこそみっともない姿をさらすまいと、疲れた体にも鞭を打ってもう一歩、もう二歩と踏み出すことができた。道に迷ったときにそっと先を照らしてくれた先生方、信頼して悩みを打ち明けることができ、どんな時でも親身になって話を聞いてくれた。
そしていつも後ろから支えてくれていた家族、どんなに疲れていても早起きをして朝食や弁当を作り、毎日毎日僕らを送り出してくれた。どんな時も僕らは決して一人ではなかった。周りで支えてくれる人がいた。その誰か一人でも欠けていたら、僕らは今ここに立っていないだろう。友よ、後輩たちよ、本当にありがとう。家族、先生方、先輩方、本当にありがとうございました。

そして、この三年間すべての基礎となっていた日々の授業。どの教科科目においても、勉強はもちろん、先生方の豊富な人生経験に基づいた教訓から現在の世界情勢に至るまで、これからの人生に役立つような多岐にわたることをこの三年間で学んだ。また、修猷の多彩な行事を通じてリーダーシップ、協調性、計画性といった様々なスキルを磨くことができた。　人との縁に恵まれ、多くの好機に恵まれていた。

今なら胸を張って言える。
修猷館に来て本当によかった。

今日、僕らは長いようで短かった修猷での生活に終止符を打つ。　真の修猷生」とは何だったのだろうか。　修猷が誇る人間」のことであろうか。だとすれば、　真の修猷生」を目指す旅はこれからも続いていく。今以上に重くなる　修猷館」という看板を背負って
歩かなければならない。世間からかけられる厚い期

待、修猷館の長い歴史、伝統を受け継ぐ一員であるという重い責任。これからの道のりはいっそう険しいものであろう。

現代社会は、「情報の洪水」とも形容されるほど情報に満ち溢れている。その真偽のほども定かではない。そんな時代を生きていく僕らは、その情報が信用に足るものか否か見極める目を養い、情報の洪水に流されないようにしなければならない。それだけではない。格差や環境問題、難民や安全保障など様々な問題を抱え、まだまだ理想的とは言えない国際社会。僕らはそのような問題の解決に尽力し、日本の社会、国際社会に貢献する人材となるべく旅立たなければならないのだ。

新たな旅立ちを前にした今、僕らの前に道はない。自らの目指す場所への道標を見極め、自らの歩む道を自ら切り拓き、目の前にそびえたつ山を自力で越えていかなければならない。不安も多いが、自ら切り拓く道には無限の可能性が広がっていて、高い山を登ればそこには雄大な将来への展望が開けている。勇気と希

望を持って今、新たな一歩を踏み出そう。

先生方、保護者の方々、そして、僕たちを様々な場面で支えて下さった、先輩方、地域の皆さま、沢山の方々のお陰で今日まで歩んで来ることができました。本当にありがとうございました。

修猷よ、ありがとう。

平成三十年三月三日

卒業生代表　吉本　力人